

翌朝、私は再び北京軍団の車に乗り込み、シャムウに見送られて稲城の街を出発した。石頭はあれ以来私に対して気不味い思いを抱えているらしいし、彼等と私の旅のスタイルはちょっと違っているのをお互い薄々感じていたので、稲城に到着してから北京軍団とはずっと別行動していたのだが、前回の稲城で知り合った上海小姐がバスチケットの購入に苦労していた事や、残り少ない中国元の懐事情を思うと、このまま彼らの車で次の目的地である理塘まで運んでもらえるのは大変に有り難く、やっぱり再び便乗させて貰ったのだ。

名残惜しいシャムウにお別れをして「またきつと稲城に来るからね」と言う私に、稲城には働きに来ていだけで、本当は丹巴^{たんぱ}という土地の出身なのだと告げたシャムウの言葉を聞き、なるほど！と妙に納得した。丁度この一人旅に乗り出す前に、当初の旅行メンバーと観光で訪れていた丹巴は風光明媚な景色を誇る土地も大層美しかったが、別名「美人谷」とも異名をとるほどに美人が多い事でも名高い土地なのだそうだ。

漆黒の艶やかな髪を長くのばし、ふっくらした色白の肌にバラ色の頬ときりっとした切れ長の瞳のシャムウは、確かにとても美しい。

いずれ丹巴に戻るので稲城にはそう長くは居ないつもりだという彼女に「丹巴の住所を書いてくれる？」と手帳を差し出すと、シャムウは戸惑ったような顔をして受け取ろうとせず、口ごもりながら自分はあまり字が書けないのだと言った。「じゃあせめて名前だけでも」と押し付けるように手帳を渡すと、恥ずかしいから嫌だとキャアキャア言いながらも手帳の片隅に小さな字で「夏姆」と書いてくれた。彼女はチベット族なので漢字はチベット語の音に当て字しただけなのかもしれないが、ちょっとづい字で書かれたその名前を見た瞬間、それまでカタカナでしか思い浮かばなかった名前に意味が添えられたような気がして、私は手元に戻ってきた手帳に書かれた文字を新鮮な想いで見つめた。

本音をいえばまだ稲城を出たくなかった。亜丁村を出る時にもそうとうな寂しさを感じていたが、広義では亜丁が属している土地となる稲城を出るのはそれ以上に辛かった。一人旅の孤独な気持ちの隙間を温かく埋めてくれるシャムウやリ・ルー・ハイの居るこの街に、もっと滞在したい気持ちは強かったが、彼らにしてみればここでの生活が彼らの現実であり、そうそう旅人の感傷に付き合っている暇などないだろう。私に与えられた中国

ピサの期限も手持ちの中国元も徐々に残り少なくなっていた。旅というのは結局出会いと別れの繰り返しなのだ。あと数日出発を延ばしたところで辛い気持ちになるのは同じ事だ。

「小姐、一緒に行くのかい？行くなら早く乗ってくれ」

北京軍団に促されて私が慌てて車に乗り込むと、この土地に対して特に何の想いも抱いていないであろう彼らの車はあっさりと稲城の街を出発した。小さくなるシャムウに手を振りながら、私はそれこそ胸が締め付けられるほどの寂しさを感じていた。

窓の外を流れて行く景色が、ついにこの旅が折り返し地点を過ぎ後は帰路に向かうのだと否応無く告げている。抜けるように晴れ渡った青い空の下に広がる風景を眺めながら、私は北京軍団に気づかれない様にそっと目尻を拭った

稲城の街を出て暫く走った頃、ほんやりと見つめていた窓の外に広がる景色の中に、大きな岩壁を背負うようにして山の斜面に立てられた寺院らしきものが見えてきた。中心に建てられた本堂と思われる建物の周りを宿坊らしい小さな建物がびっしりと取り囲み、背後の大岩壁と相まってまるで要塞のように見える。

うわぁ！あれは何だろう～？ 私はこのあたりの土地についての予備知識が無い為に知らなかったが、どうやら有名なお寺らしい。車を走らせ自由に好きな場所を訪れながら旅をしている北京軍団は観光に立ち寄り事を決めていたらしく、興味を惹かれている私の心中を察したかの様に車は走っていた道路をそれてお寺の方向に進路を向けた。

門の前に来て見ると、やはり歴史のありそうな立派な寺院だ。5階建て(?)ほどの造りになっている寺院の内には本殿の他にも小さな部屋がたくさんあり、それぞれの部屋に仏像が置かれていたり僧侶が坐っていたりした。

高僧となるとそれぞれがお寺の中に自分の部屋を持っているらしい。私達は寺院の中の階段や廊下を登ったり下りたりしながら、そんな高僧の部屋を渡り歩いてお参りしたり、僧侶に何やらお守りのような意味が込められているらしいコヨリのようなものを頂いたりしたが、見ていると北京軍団は一人一人のお坊さんにそれぞれ100元紙幣をお布施として差し出している。

ええ～～～!? でも、それって随分多いんじゃないの

～？ 中国人としての金銭感覚は、単なる旅行者の私にはいまひとつピンとこないが、それにしても私がこの旅で泊まっている宿は概ね一泊20元から30元の間くらいだったし、成都から一日走り続けて辿り着く康定までのバス代は125元だし、稻城で知り合った中国人の旅行者達と食事した時に聞いた話では、中国での一般的なOLの月給はおおよそ2000元くらいとの事だった。

何といっても、日本円で1万円を両替すると当時のレートで650元くらいだった筈だ。100元といえばおおよそ1500円。日本円に換算してもお賽銭としては結構な額と思えるが、それも一回だけではなくそれぞれが何人もの僧侶に会う度にだ。

そういえば車も高級そうなランドクルーザーだし、この人達はお金持ちなんだなあ・・・他人のお賽銭額にあれこれ思うなんて下世話な話だが、シミシミとサイフの残金を気にしながら細々と旅を続けている貧乏旅行者の私としてはため息がでる思いだ。すると北京軍団の一人が寺院内の廊下を歩きながら「こんなに坊主がいると賽銭額がかさんで、たまんねえな」と愚痴をこぼしている会話が聞こえてきた。

別にお寺に強要されているわけでも無し、嫌なら払わなきゃいいのに・・・そんな気前の良いお布施が効いたのかどうかは知らないが、私達が寺院の内部をお参りし終わった頃、ある部屋の僧侶に命じられて剃髪の頭も青々しい、可愛い少年僧侶がニコニコしながら白い粉の入ったバケツを持って現われた。

いったい何が始まるのだろうか、先を歩いて行く少年僧や北京軍団の後について寺院の外に出て行くと、庭先の奥の方には池(川?)があった。少年僧は粉の入ったバケツに池の水を入れるとオレンジ色の僧衣の袖を捲った腕をグルグル回して捏ね始め、いくつかのお団子を作ると私達に配ってくれた。

何これ？ 私は意味が解らずに北京軍団のメンバーを見ていると、皆は配られたお団子を小さくちぎって池に投げ入れている。すると、池の中にいた魚が集まってきて奪い合うように投入されたお団子をピチピチピチピチッと食べ始めた。

「ほら、小姐もこうやって！」

ピチピチピチピチピチ・・・

何じゃこりゃ～！こんな事なら何もお寺で有り難がってやらなくても、日本の公園でだって何度もやった事あるぞ～！とは思ったものの、魚が口を開けて集まってくる様子はやはり結構面白い。途中で飽きてしまったらしい北京メンバーの粉団子まで譲り受けて、一番楽しみながら餌まきをしていたのはきっと私だ。

つまりこれは自然動物に食べ物を施すことで功德を積むという、仏教的な考えに基づく行いなのだろうと思われた。

私が2年ほど暮らしていたタイでは、お寺で小さな籠に入れられた小鳥が売られているのをよく見かけた。初めは飼うために売られているのかと思っていたが、それは大間違いで、小鳥は買って籠から放してやるために売られているのだ。タイの仏教的な考え方では現世で功德を積んだ者が来世で幸福を得ると信じられているために、来世の幸せを願いお金を払って功德を買うという訳だ。しかし、それでは功德を商売として売っている小鳥屋の方は常に逃がすための小鳥を捕まえて籠にとじこめなければならない訳で、それを生業にしている人物の来世は随分心配ではないか。

そんな事を考えながら池の魚に粉団子を撒いているうちに、私の手元にあったお団子も無くなってしまった。

私達を池まで案内してくれた笑顔の可愛い少年僧に年齢を尋ねると、13歳という事だった。私が3年前に出会った時の亜丁の少年と同じ歳だ。そういえば、赤い頬やちょっとはにかんだような笑顔など、ちょっとぴり当時の彼に面影が似ているようにも思えた。

「あなたの家族はどこに住んでるの？」

「いつからこのお寺に来ているの？」

何気ない世間話のつもりで少年に話しかけていた私が

「あなたはいつまで此処にいるの？」

と尋ねると、それまでニコニコと私の質問に答えていた歳若い少年僧は、ちょっと困ったような顔をして答えに詰っていた。私の中国語が下手な為に意味が通じていないのかと思い、改めて

「あなたはいつ自分の家に帰るの？」

と尋ねなおすと、そばに居た北京軍団の一人が私に言った。

「彼は帰らないんだよ」

「え？」

「彼は自分の家を出て僧になったんだ。一生寺で暮らすんだよ」

「ええ！？・・・」

私は思わずまだ歳若い少年僧の顔を見つめ直した。

私の暮らしていたタイでは、男子は成人すると一生のうち一度は出家するという習慣がある。詳しく確かめた事は無いが近年のタイにおけるその習慣は、どちらかといえば親がわが子を出家させ神様に寄与する事で功德を積むための儀式的な要素が強いようで、本来の僧侶となる為に出家する事とはだいぶ意味合いが異なっているようだ。

実際に「出家するのは親孝行の為だ」とタイの友人が語るのを聞いた事もあった。それ故忙しい現代では学校や仕事の休みの合間を縫って髪と眉をそり落とし「1週間だけ出家してきた」などと坊主頭に帽子を被ってあっという間に世俗に舞い戻ってくるインスタント出家が一般的になりつつあるようだ。

仏教的な信仰心がとても厚いとされているタイだが、小鳥の件といい出家の習慣といい、どうも物事がドライに形式的に簡略化されすぎているような気がして、他国の習慣にケチをつけるつもりはなくとも「そんなので功德が積めるの？」と疑問に感じない事もない。

勿論このチベットエリアでそんなインスタント出家が行われていると考えていた訳ではないが、まだまだ幼い面影の残る少年と、家族と別れ俗界から切り離された山寺で一生暮らしていく人生が既に定められているという事実が即座には結びつかず、私は少なからず衝撃を受けてしまった。

「貧しくて子供を養いきれない家は、子供を出家させるんだ。子供だってその方がちゃんと毎日食事でも食べられるし学問を学ぶ事もできるからいいのさ」

それは北京軍団の一人が私に言った言葉で、事実なのかどうか私には判らない。しかし亜丁のように観光で比較的容易に大きな収入を得る事のできる特殊な村を除き、中国の最奥とも言える山間部での村の暮らしは、やはり楽ではないように思われた。少年僧の全てがそうだとは思わないが、確かにそんな事もあるのかもしれない。

だけど……。目の前にいる少年僧は、まだまだ遊びたい盛りの子供と言っているような年頃だ。こんな少年が家族から一人離れ、この先の人生をお寺の中の閉ざされた世界だけで暮らしていくの？ 三年前この少年僧侶と同じ年齢だった亜丁の少年が、自由に野山を駆け回って遊んでいた事や友人らと稲城の学校に通っていた事、現在では故郷の村から成都という都会に出て生活し学んでいる事を思うと、私は微かに胸が苦しくなるような気持ちになったのだが、私の前に立っている少年僧の笑顔はとても明るく、家族と別れて暮らす寂しさの影のようなものは全く感じられなかった。

どのような経緯でこの寺に暮らすようになったのかは知らないが、きっと先輩の僧侶達に可愛がられながら仏教

を学び、幸せに暮らしているのだろう。何が良いとか悪いとかでは無く、人の人生には本当に色々な形があるんだな・・・と、これまでに経験した事も無いほど深く感じて言葉が出なかった。

この少年僧がこれからどのように立派な僧侶として成長していくのか、いつかまた機会があれば彼を訪ねてみたいような気持ちになり、いつもズボンのポケットにいれている手帳を取り出して彼の名前を書いて貰った。

何年後になるのか判らないが、いつの日か再びあの寺院を訪れたら、手帳に記された剛瑪亞熱(ガンマヤルア)という彼の名前をたよりにこの日の小年僧を捜し当てられるだろうか？

北京軍団の車に乗せて貰っていたお陰で立ち寄る事のできたこのお寺は、街や村から離れた場所にあるためにマイカーやツアーで来ているのでない限り、訪れるのは難しい場所のように思えた。稲城から普通に長距離バスに乗っていたとしたら、きっと私が居眠りしている間に通り過ぎ、一生この場に来る事は無かったのだろう。そう思うと貴重な訪問だった。

車は再び出発し、海拔4000メートルの真っ青な空の下に何処までも緑の絨毯が広がっている高原地帯の道を、緩やかにアップダウンを繰り返しながら走り続けた。

そろそろ理塘の街が近づいてきたと思える頃、助手席にいた北京軍団のメンバーが窓の外に何かを見つけて「あれは何だ？」と声を上げ、運転していた石頭が車のスピードを緩めた。ウトウトしかけていた私が、座っていたのとは反対側の窓の外に目を向けた時には、特に気を惹かれなかったらしい北京軍団達は「別に立ち寄るほどじゃないだろう」と意見を一致させ再び車を走らせてしまったのだが、あっという間に後ろに流れていく景色の中にチベット仏教の祈祷旗であるタルチョが張り巡らされた岩山が目に見え込んでハッとしました。

そのとたん、私は前回の旅で強く強く希望していたにも拘らず、すっかり忘れていたある事柄を思い出し、亜丁を出てから沈みっぱなしだった気持ちが、次の目的を見つけた事で再び上昇線を描いてメラメラと燃え上がってくるのを感じていた。(次号に続く)

